[redacted]

【名作童話】びつこのお馬 (二)

小川未明

二郎は、自分の見た、悲しい、あはれな馬について、よく兄や、姉にわからせたいと、いろいろにあせつて、どもりながら、うつたへましたけれど、相手にしてくれないので、『そんなら、あしたの夕方、外に出てゐてごらん、きつと、あの馬が通るだらうから―』と、二郎は、兄さんや、姉さんに言ひました。『あ、通つたら、知らしておくれ』と、兄さんや、姉さんは、答へました。二郎は、あくる日の夕方、友達等が外に出て、鬼ごつこをしたり、獨樂を廻したりして遊んでゐるじぶんに、ひとり、みんなからはなれて、ぼんやりと往來の上に立つて、通る馬や、車をながめてゐました。また、昨日のびつこの馬が通るかと思つたからです。二郎の立つてゐる前を通る車や、馬は黄色な埃を立てて行きました。埃は、これ等の馬や車が行つてしまつたあとでも、なほ空中にただよつてゐましたが、つひに昨日のびつこの馬は通りませんでした。『二郎ちやん、びつこの馬は通つたの』と、家にはいつて兄さんや、姉さんは、二郎に問ひました。二郎は、さびしさうに頭を左右に振りました。しかし、たとひ、今日、この道を通らなくとも、どこかの往來の上を今日もまたあのびつこの馬は、通るであらうと、二郎は、子供心ながらにも想像されたのです。そして、そのいぢらしい姿を思ふと、二郎は、あはれになつて涙ぐまれたのであります。

〇

新京中央郵政局私書函一〇一號青旗社